

# 歴史に学ぶ

大阪経済大学特別招聘教授・  
経済評論家

岡田晃

## 第四十六回

### 洪沢栄一の盟友〜ベンチャー精神の塊・大倉喜八郎

新紙幣の流通が始まって半年余り。新一万円札の顔としてお馴染みになった洪沢栄一は「日本資本主義の父」と言われるが、その周りには多くの協力者がいた。中でも大倉財閥の創始者・大倉喜八郎は盟友、または同志のような関係だった。

#### 命がけの冒険で次々と新事業 幕末動乱でビジネスチャンスつかむ

喜八郎は一八三七年、越後国新発田町（現・新潟県新発田市）で生まれた。生家は名主だったが、才気に富み独立心旺盛だった喜八郎は十八歳で単身江戸に出て、饅頭店の丁稚となった。

三年間働いてコツコツ貯めた資金を元手に一八五七年、下谷上野町（現在のアメ横近辺）で乾物店を開業した。間口二間の小さな店だったが、これが起業家としてのスタートだった。

商売は繁盛したが、喜八郎はそれで満足していなかった。その頃の日本は黒船来航後に開国、一方で尊王攘夷論が高まるなど世情騒然としてい

た。そんなある日、商売で横浜に出かけた喜八郎は、外国の蒸気船の姿や銃器が荷揚げされる光景を目にして衝撃を受ける。そして「今や動乱の時代。これからの商売は武器だ」とひらめいた。

すると一八六六年、乾物店をあっさりと廃業し、八丁堀の鉄砲店に見習いとして入ったのだ。そこで鉄砲商売のコツをつかみ、四カ月後の一八六七年二月、神田和泉橋通り（現・千代田区岩本町付近）に鉄砲店を開業した。

何と「無鉄砲」なことか。後の彼の人生は冒険の連続となるが、これが最初の冒険だった。だが単なる冒険ではなかった。時代の変化をしっかりと読み、ビジネスチャンスをつかんでいたのだ。

喜八郎の読みは的中する。その年の十月に大政奉還となり、情勢緊迫の中で幕府も各藩も鉄砲を大量に購入し始めた。喜八郎は横浜に行つて外国人商人から鉄砲を仕入れ、江戸に運んで納入した。

だが実は、江戸と横浜の道中は強盗が出没していた。そのため喜八郎は護身用の短銃を持参して

いたという。まさに命がけだったが、鉄砲ビジネスは大繁盛となり、名が知られるようになる。

年が明けて戊辰戦争が起き、官軍が江戸に進軍してきた。江戸中が騒然となる中、喜八郎は官軍から武器食糧一切の調達を命ぜられた。「官軍御用達」となったのだ。逆に上野寛永寺に立て籠もった彰義隊に睨まれ、連行されたこともあった。

#### インフラ事業、貿易に進出 民間人初の欧米視察など冒険続く

時代は明治の世となる。喜八郎は「鉄砲商人」から「卒業」し、明治新政府のインフラ近代化事業に協力していく。日本初の鉄道の新橋駅建設工事、大火で大被害を受けた銀座の復興工事などを次々に請け負った。新しい時代への移行に沿った新たなビジネスへと転換を図ったのだ。

続いて貿易業に進出する。横浜に貿易会社を設立し、毛織物の輸入、お茶や生糸の輸出を手掛けるようになった。



この仕事をするうちに海外をこの目で見たいと思ひ立ち、一八七二年、欧米視察の旅に出発する。サンフランシスコからニューヨークなど、さらにロンドンや欧州各地の経済事情を一年余りにわたり見て回った。当時の日本では民間人の海外視察は初めてで、これも大冒険だった。ロンドンでは政府の岩倉使節団と出会い、伊藤博文や大久保利通らと親しくなるといった収穫も得た。

帰国後の一八七三年、欧州で学んだ会社組織を参考に大倉組商會を銀座に設立した。これまで手掛けてきた貿易、商業、土木建築などの事業をまとめ、これが大倉財閥の起点となる。

だが喜八郎の行く手にはさらなる「冒険」が待っていた。一八七四年、政府の台湾出兵に際し軍需物資の運搬を請け負い、作業員五百人を率いて台湾に渡ったのだが、現地ではマラリアが蔓延

しており、百二十人余りが死亡。全く罹患しなかったのは喜八郎を含めわずか数人だったという。

続いて一八七七年。朝鮮で大飢饉が起こり、日本政府は救援米の運搬を決めたが、どの業者もしり込みして引き受け手がいない。それを喜八郎が引き受け、無事に任務を遂行した。ところがその帰路、船便がなく、やむなく漁船に乗せてもらったが、暴風雨にあい遭難寸前となってしまう。かろうじて対馬に避難したものの、数日間の足止めを余儀なくされた。

これらは「九死に一生を得る」を地でいく経験だったが、喜八郎の信用を高めることとなった。

### 渋沢栄一と盟友関係に 数多くの企業設立で互いに協力

喜八郎が渋沢栄一と出会ったのはその頃だ。喜八郎は「国家のためには一身を捨てても、この仕事（朝鮮への救援米運搬）は成し遂げなければならぬ」と栄一に語り、栄一は「この人は尋常一様の人ではない。たしかにわが党（仲間、同志）の一人であると思った」と後に語っている。

こうして肝胆相照らす仲となった二人は、東京商法会議所（現・東京商工会議所）と東京株式取引所（現・東京証券取引所）をはじめ、大阪紡績（現・東洋紡）、東京瓦斯（現・東京ガス）、東京電燈（現・東京電力）、帝国ホテルなどを次々に協力して設立した。

一八八七年には大倉組商會の土木建築部門と大阪の藤田組が合併して、日本初の建設業法人となる有限責任日本土木会社（現・大成建設）が発足

し、喜八郎が社長に就任した。栄一はその創立委員長となり、取締役にも就任している。

このように栄一と喜八郎は互いに協力しあつて数多くの企業設立に奔走した。栄一が設立した企業が約五百社に及ぶことはよく知られているが、喜八郎のそれも二百社以上に達する（それぞれの単独によるものも含む）。こうして喜八郎は明治の中頃には日本有数の企業家となっていた。

喜八郎が築いた大倉財閥は終戦後に解体され消滅したが、現在も前述の大成建設をはじめ、日清オイリオグループ、サッポロホールディングスなど数多くの企業がその系譜を受け継いでいる（ちなみに、ホテルオークラは喜八郎の死後に長男の喜七郎が設立した）。

以上見てきたように、リスクをとって挑戦続けた喜八郎はまさにベンチャースピリットの塊のような人物であった。近年では「スタートアップ」と表現することが多いが、喜八郎の場合は「ベンチャー」と呼ぶ方がふさわしい気がする。

しかもそれは闇雲な冒険ではなく、①国が進む方向や時代の変化を読む②その中で新しいニーズをつかみビジネスチャンスを見つける③多くの人とのネットワークを築き協力関係を広げる——などがポイントだった。

### 岡田晃（おかだあきら）

一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇二二年、同特別招聘教授。新刊「徳川幕府の経済政策——その光と影（PHP新書）」。